



TRACK 8

I'm Yours

But I won't hesitate no more, no more
It cannot wait, I'm yours...

Track.10 I'm Yours

肌から伝わる厳かな雰囲気。周囲に人はいない。俺が早く来すぎたせいだろうか、入り口にいた住職でさえも眠そうに瞼をこすっていた。

「久しぶりだな」

俺はひとり、冷たい墓石の前でそう呟いた。刻まれている文字に彼女の名前を見つけ、不意に俺は携帯を取り出す。写真の中の彼女は笑っていた。少しも動くことはない。何故なら彼女は、ずっとこの写真の中に留まっている存在なのだから。

「そう、お前は昔からそんな風に笑ってたな」

たくさんの花に囲まれて、明るい笑顔を振りまく少女——尽紫茜の最期の写真だ。

茜が死んでから、数年の月日が流れている。今更、その死について何も言うことはない。泣き喚くことも、苛立ちを覚えることもない。誰かの死を受け入れるということは、こんな感

じなのかもしれないのだろう。終わってしまったのだから、戻ることはないのだから、ただそれを受け入れるしかないのだ。

以前より少しだけ大人びた俺を、やはり写真の中の少女は笑っていた。

「お前はずっと高校生のままか。俺たちはすっかり大人になっちゃったよ」

不謹慎かもしれないが、高校生の心をずっと持っていていられるのは羨ましい。俺たちはこの先、社会の波にもまれて、社会という枠組みにはめ込まれていくのだから。もちろんそれが間違ってるわけではない。俺は今も昔もずっと、そうやって周りに合わせて生きている。ただそれでも胸を張れないのは、

「俺は現実を受け入れたら思っていただけで、本当はその現実から目を逸らしているのかもしれない」

俺の声は寒空の下に溶けていく。

「だから俺は、その矛盾を抱えてこれからも生きていくよ。これからも今まで通りに」

口元から零れる白い息が俺の決意の証拠だ。茜は何も反応しない、その代わりに俺が彼女の写真を優しくなぞった。心なしか、暖かい気がする。

「今日はお前の誕生日だから。会いに来ようと思ったんだ、誕生日おめでとう」

言うべきことは終えた。しかし、何故か彼女の墓の前から離れることが惜しくなり、俺はその場に腰を落とした。ほんの少しくらい世間話をして、彼女は怒らないだろう。

「最近、色々なことばかり起こってるんだ。本当に、信じがたいことばかりで……天城紫乃、ハンス・ブリーゲル、アンダーソン・カイル……普通の人間なら、まず出会うこともない奴らばかりだよ。本当、俺は普通に生きたかったのにな」

あまりにも非現実的な自分の言葉に、思わず俺は笑ってしまった。そして、俺は何も言わないう墓石を見上げた。どこか彼女に似て、どんと構えてるような気がしなくもない。

「お前のことだ、どうせそつちの世界でも明るく笑ってるんだろ。あまり周りに迷惑はかけない方がいいぞ、俺も葵もお前の面倒を見るにはまだまだ先が長そうだからな」

そういうと、俺はやつと重い腰を上げることにした。先ほどよりも、どこか心が軽くなったような気がする。

「じゃあ、俺はそろそろ行くか。また来るよ」

帰ってくる声はない。当然だ。けれども、やっぱり彼女は笑っている気がする。

いつものあの笑顔で。

墓参りを済ませると、入り口で待っていた人物がぱつと顔を上げた。

「何で、お前は来なかつたんだ？」

「いや、そこまで親しい仲でもなかつたし……気まづかつたというか」

「……変なところで人見知り出してくるなよ」

思わず俺は笑いそうになってしまった。いつもの彼女のイメージとは真逆すぎる。

「さてと。外も冷えるし、とつとと帰るか」

「うん」

そういうと、彼女——リニアは俺の腕に手を回してきた。いつもの俺なら、離せとかいつて振り払うのだが、今はそんな気分になれない。ただでさえ気温は氷点下だ、単純に暖かさを欲しているのだろう。それにバス停まではあと少しだ。たまには、いや、一年に一回くらいは黙ってこのまま歩いてやるう。

ちらりと、彼女を横目で見る。てつきり振り払われるはずでいた腕が何もしないせいで、ほんの少し動揺した様子が伺える。そんな態度をされたら、俺も気ままずくなるだろうが。

結局、彼女の腕は離れることのないまま、俺たちはバス停にたどり着いた。数分でいける距離のはずなのに、三十分以上もかかったような気分だ。

ふと、何かが頭上に落ちた気がした。ぽつり、ぽつりと次々にその白い塊が空から落ちてきた。

「雪だ」

今日は快晴になると聞いていたはずなのに、いつのまにか空は灰色に覆われていた。

「わー!!雪だ!!」

俺の腕から離れたリニアは、子供のよう嬉しそうな顔をしながら空を見上げた。そして天に向かって両手を広げる。初めての雪でもないだろうに、何故そこまで盛り上がるのか。だが、彼女の横顔を見ると、自然と俺の口元にも笑みが浮かんでいた。

「聡太?どうしたの?」

「いや、何でもない」

リニアは不思議そうな顔をしたが、再びその顔は笑顔へと戻った。随分ご機嫌なのか、彼女はそのままバス停の前でくるくると鼻歌交じりに回り始めた。

「Well you done done me and you bet I felt it... I tried to be chill but you're so hot that I melted I fell right through the cracks and now I」

綺麗な歌声だ。そういえば、リニアはヨーロッパの北の方で生まれたんだっけか。通りで雪が似合うわけだ。透き通るような銀髪が、雪で霞む世界に溶け込む。柄でもないが、俺はそれが綺麗だと思ってしまった。

「Before the cool done run out I'll be giving it my best. And nothing's going to stop me but divine intervention...」

「リニア、それなんて曲？」

俺が尋ねると、彼女は照れくさそうな笑みを浮かべて、俺の腕を握りしめた。

「——I'm yours」

翌日。俺は大学の図書館にいた。しばらく事件がごたついていたので、全く勉強をしていなかったからだ。参考書とノートを広げ、準備は万端だ。しかし、俺の視線は携帯に向けられていた。勉強前の一休みというやつである。かれこれ一時間は経とうとしているが。

メールやカレンダー、様々なアプリを暇つぶしに触っていたが、気まぐれに俺は電話帳を開いた。思った通り、電話帳は数人ほどしかない。何百人も登録できるなどという謳い文句は俺には必要ないのだ。

大学生活も残すこと約二年。別に自ら孤独を選んでいたわけではない。ただ忙しさに追われていただけだ。友人なんていらないうわけではない。人間関係にも時間と金銭は必要ないわけである。

それに全くいないわけではない。たまに会えば、軽く会話する程度の友人はいる。もちろんそんな人たちとは、卒業すれば二度と連絡をすることもない、そんな薄い縁だろう。

三月末、季節もそろそろ変わる頃である。俺は春から大学三年生になる。

先のことを思うと気が重くなった。俺は携帯をしまおうと、目の前の参考書に向き直った。まるで文字が生き物のようで、全く頭に入っていない。誰かが、果たしてお前にこの文章が理解できるのか？と問いかけているようにも思える。

「こんな気分で勉強できるわけがないだろ」

俺は早々に予定を切り上げて、図書館を後にした。来た時よりも、足が重たく感じるのは気のせいではないだろう。

「がお」

「……」

「がお」

「何やってんだ」

図書館を出ると、見慣れた女が妙な声を上げて立っていた。リニアだ。ある意味驚きはあったが、それ以上に冷静さが勝ってしまい、俺は至極真つ当な返事をしてしまった。

「が、がお」

「腹でも減ってんのか」

すると、彼女は不満げな様子で地団駄を踏む。どうやら不正解のようだ。そのおかげで、やつとリニアは奇声をやめて、人間が理解できる言葉を話してくれるようになった。

「お、驚かせようと思ったの」

「あー……全然驚かなくてごめん」

「ちよ、謝らないで!!」

リニアは恥ずかしそうに俺の肩を叩いてきた。地味に痛い。

「うん、今度はびっくりさせてあげるから。もう少し研究しとくわ」

「いや、まじでやめろ」

俺にも、周りにも迷惑すぎる。

俺は再び歩き始めて、学校の出口へと向かった。もちろんリニアは後を追ってくる。

「それで？お前は何の用だ？また遊びに来たのか？」

「ううん。そうちゃんに会いに来たの」

そういつてリニアは後ろ手に組み、ご機嫌そうにスキップをする。見るからに、のんびりそうな日々を過ごしているように思える。

「昨日もあつただろうが」

「そうだけど、今回は私から提案しようかなって」

何が違うのか俺にはまったくわからん。乙女心とは複雑なものだ。

しかし、隣を歩くりニアの顔はとてまたのしそうだった。だからだろうか、いつの間にか俺の足取りも軽くなっていた。

リニア・イベリン。俺の隣を歩く女。年は教えてくれないが、おそらく俺より上なのは確かだろう。背もでかい。といつても、俺より数センチほどなので、今後俺にも勝算はあるはずだ。楽観的にいこう。外見は、悔しいが美人といえるだろう。何よりもきれいな銀髪に碧眼の瞳、それに加えてスタイルも整っている。おかげで俺は彼女と歩きたびに、周りからの視線に怯えなければいけない。それほどまでに彼女は周囲からも注目の的だった。

問題は性格の方だが、今となつては俺も慣れたものだ。男性でも女性でも気さく話しかける奴。何より自由人という言葉が当てはまるのかもしれない。

歩きながら、俺は改めて彼女について分析した。俺が訓練所を出て、魔女の弟子と認められた三年前。リニアとはその時に知り合った。初対面からぐいぐい迫ってきていたが、突然姿を消した奴。いろいろと事情はあったと聞いたが、それでもやっぱり彼女は自由だったと結論づけるのが一番似合うのだろう。

大学の校舎を出て、俺は思わず空を見上げた。今日こそ見事な冬晴れだ。この寒ささえ、青空をすつきりと感じさせるためにあるように思えるほどである。

ふと、リニアが俺の前を歩いた。一瞬、彼女の髪が俺の鼻先をかすめる。仄かに香る女のおいに、思わず俺は顔を背けた。しかし、リニアにはバレバレのようである。

「今、私の髪の毛のにおい嗅いだでしょ」

「は？そんな変態みたいなこと、するわけないだろ」

「えー、わざと当たるようにしたのに」

この女……確信犯か。

ほんの少し、拗ねたように頬を膨らませるリニア。だが、すぐにその顔はいつもの明るい笑顔へと戻った。やはり、彼女には笑顔が似合っている。

三月も後半、平日ということもあるのだろう、大学はもちろん、帰り道にもすれ違う人は殆どいなかった。

隣を歩くりニアは楽しい表情をしているが、何も話さない。対する俺も話題が見つからずにいた。なぜなら、以前よりもリニアが俺に付きまといてくるからである。これだけ引つ切り無しに会っていたら、自然と話すこともなくなるだろう。

そう、彼女は前回の事件から何かおかしい。

不安……のようなものを抱えているのだろうか。彼女は自身が普通の人間ではないとわかってしまった、俺もどうやら普通の人間とは程遠いようである。だから、これはきつと似た者

同士と過ごして不安を和らげたい。そういうことなんだろう。

ケラーの催眠でリニアの体に何か変化があつたのも間違いない。実際、俺は当人ではないから何もわからないが。大きな力を秘めていて、それを自覚しているという点で俺とリニアは根本から異なっている。俺には彼女の心を理解することはできないだろう。

しばらくしてバス停が目に入った。

さすがに数人の客はいるようで、俺たちは最後尾へと並ぶことにした。三月の末とはいえ、未だに風は冷たい。いつのまにか晴天から曇り空になり、わずかに小雪もちらついていた。そういえば、雪が降っているというのに、傘を差すことも忘れていた。

「春が待ち遠しいね」

ふと、リニアは俺の顔を見て言った。俺が空を見上げていたところを見ていたのだろうか、彼女は俺の髪に積もった雪をふつと息で払いのけた。突然近づいた彼女の顔に、俺の心臓は跳ね上がる。努めて冷静さを保とうと、俺は彼女から顔を背けた。そしてすっかり冷え切った自身の両手に息を吐く。煙のように白い息がふわりと立ち上がった。次いで両手を擦り合わせる。多少は暖かくなったであろう。俺はそのまま両手を、リニアの頬へと当てがった。

「え、聡太!？」

「……なんだよ」

俺の行動が完全に予想外だったのだろう。リニアは両目を開けてぽかんと口を開いていた。

「あつたかいか？」

「……うん、聡太の愛情を感じる」

「阿呆」

そんなもの欠片も籠ってないわ。俺は両手でリニアの頬を押しつぶすと、再び自身のポケットの中へと戻した。

バスはまだ来ない。

「ねえ、そうちゃん」

ふと、リニアが口を開いた。数秒間程、何かを考えた後、

「四月になったらさ、どこか綺麗な花が咲いているところに遊びにいかない？」

「まあ、たまには皆で出かけるのもいいんじゃないか？先生と奏と、葵には俺から声かけと

くよ。あと、ノエルと赤城さんたちも誘うか」

頭の中でいろんな人の顔を浮かべる。しかし、リニアはどこか気に入らないようである。

「そうじゃなくて……」

「わかってるよ……二人で行きたいってことだろ」

「そう」

俺の返答がそんなに嬉しいのか、リニアはふわりと笑った。そして周囲の視線に目もくれず、くるくると踊り出す。

「おいつ、大人しくしとけよ」

「えへへへ、つい嬉しくて。歓喜の舞だよ」

「こんなところで踊るな」

——三月の終わり、粉雪の舞う昼過ぎ。冷え切っていた俺の両手は、いつのまにか仄かに熱

を帯びていた。居心地の悪さもない、もう彼女との距離感は慣れたのだろう。なんてことない、これが当たり前前の平穩。

だが、平穩な日々はすぐに終わった。

まるで俺には非日常がお似合いだと、言われているかのように。

一週間後の早朝、俺はコンピュータ室にいた。別に図書館での勉強をあきらめたわけではない。春休み中に履修登録を済ませておかねばいけないからだ。

暖房がついた、ちよつと息苦しい室内で俺は淡々とした表情でマウスをクリックしていく。

共通科目の方は取り終えている。あとは必修と選択と……。いろんな科目を見ているうちに、今までに受けた授業の項目に目がいった。懐かしさと共に、内容を思い出してみるが全く記憶にない。そういうものか。

俺は自嘲気味にため息を零した。ふと、窓に目をやる。コンピュータ室は、ほかの教室より窓が大きく作られているため、自然と外に目が行った。

——今日も雪か。

窓の白さが余計に外の寒さを物語っているようで嫌になる。

再び俺はパソコン画面と向き直った。俺は基本的に午後の授業は受けないつもりだ。おまけに月曜と金曜も入れたくない。三年にもなれば、多少の融通は利くような日程になった。俺は満足げに入力を終えると、足早に出口へと向かう。

やはり外は寒かった。暖房のきいた室内だったため、余計に寒さが染み入る。

「お？鈴木じゃんか」

すぐ目の前で聞き慣れた声があった。

「先輩」

「おー、久しぶり」

掛け声とともに先輩が迫ってくる。もちろん俺は先輩からの熱い抱擁を華麗に躲した。

「おいおい、何で避けた。寂しいじゃないか、久しぶりの再会だろ」

「何が久しぶりですか。ついこないだ会ったじゃないですか、俺だけが出席したやつ」

「あー、まあそんなときもあるだろ」

そういつて先輩は悪びれた様子を一切見せることなく、からからと笑った。

「……それより、先輩こんなところで何してるんですか？」

「何って、履修登録だけど。寮のパソコンが壊れちまってさ、おかげにルームメイトも貸してくれないし、仕方ないからここにきたってわけよ」

驚いた、こんな雪が降る中、わざわざ学校に。思わず俺は気の抜けた声を返してしまった。

「先輩も卒業しようという意味があるんですね」

「お前は俺を何だと思ってるんだ」

そういつて先輩は俺の頭を軽く小突いた。だが彼の顔から笑みが消えてないあたり、まだ冗談の内に済まされているんだろう。ふと、先輩は外の寒さを思い出したのか、自販機で暖かいコーヒーをおごってくれた。おかげで、もうしばらくは彼に付き合わなければいけない、別にいやだというわけではないが。

先輩の口からは何てことない世間話ばかりが出てきた。しかし相手を退屈にさせないあたり、さすがとも言えるべきか、俺との圧倒的なコミュ力の差に多少の腹が立った。まあ、その代償として単位が取れない体になってしまったというのなら、それも仕方のない話である。

「そういえば」

最後の一口をぐいっと飲み干した後、先輩は突然真面目な顔で俺に問いかけてきた。

「外国人の彼女とはまだ付き合ってるのか？」

思わずコーヒーを吹き零しそうになったが、何とか俺は踏みとどまった。

「何ですか急に……それにアレは別に恋人とかでもないですよ」

「何言ってるんだ、お前らは立派なカップルだっただろうが」

どうやら反論の余地はないようである。大人しくその設定を聞き入れるしかないようだ。

「それで？あいつがどうかしたんですか？」

俺は半ばやけっぱちな口調で、先輩に聞き返す。しかし、返ってきた声はまたしても真剣な声音をしていた。

「そばについててやれよ」

「え？」

何故彼がそんなことを気にするのか、そんな疑問より先に先週のある出来事が俺の頭をよぎった。しばらく出かけてくる、と彼女は何てことないように言っていた。理由はわからない。いや、それ以前に俺はそれを冗談だと思っていたし、今も冗談だと思っている。きっと今頃は幼稚園でゴロゴロしているはずだ。それなのに――、

――胸騒ぎがする。

「ん？鈴木、お前このニュース知らないのか？」

ふと、携帯を眺めていた先輩が訝し気な声をあげた。俺が聞き返す間もなく、先輩は画面の文字を読み上げる。どうやら、何かの記事を開いているようだ。

「外国人襲撃事件。近所で起きてるらしいぜ、死んだ人もいるんだって。何より、おかしい事件だって噂で、発見された遺体の髪はみんな白く変色していたらしい、変な話だよな」

先輩は気味が悪そうに顔を歪める。対する俺は、先輩の手元を覗くことで精一杯だった。

「お、監視カメラの映像だって」

先輩は再生ボタンを押す前に、ちらりと俺の顔を伺った。先輩なりの気遣いだろう。俺は何も言わずに頷き返した。それを合意と捉え、先輩は携帯の画面に指を滑らせる。

動き出した映像。ほんの数秒間の動画だった。しかし、その映像の端には、あいつが——俺の良く知る人物が映っていた。

「……すごいな、よくもこんな映像が世間に流れてるもんだ」

そういうと、先輩はすぐに携帯をしまった。

「鈴木？お前、大丈夫か？」

「あ、俺、ちよつと用事が」

「鈴木、お前顔色悪いぞ」

先輩が心配そうな顔で俺を覗き込んだ、気がする。

いつのまにか俺の体は走り出していた。遠くで先輩が俺の名前を呼んでいる。

しかし、俺は一度たりとも振り返らずに走り続けた。早く、早く俺の心は焦るばかりだ。

汗が頬を濡らしていく。この汗は走ったからなのか、それともこの胸に湧き上がる不快感故の冷や汗か。考えたのは一瞬だった、すぐに俺の思考はクリアされた。今は一刻も早く、あいつに、リニアに会わなければいけない。

「あの馬鹿ッ……」

彼女への苛立ちを吐き捨て、俺は雪の降る街を走り出した。

雪は止まない。世界は真つ白に染め上げられていた。

一步、また一步と足を進めると、踏みつけられた雪の音が繰り返し聞こえる。

昔から、この音が好きだった。柔らかさと、それと同時に自身が歩いていると確かに感じさせてくれるこの感触も、誰にも踏みつけられていない白銀の地面でさえも、私は大好きだった。

小さく息を零す。

冷え切った手足に比べ、自身の熱を確かめる方法はこれしかなかった。私は一層、きつく傘を握りしめる。微妙に積もってきた。道路にもうつつすらと白い塊ができていく。

——昨日も見えた景色だ。

余計なものは何も持たず、一週間ほど、私はこの周囲の土地を見回っていた。誰に言われたからでもない、私が決着をつけるべきだと思ったからだ。

私は再び空を見上げた。

うつすら銀色を帯びた空。まるで私の髪のような色をしていた。

「なぜ魔法を習ったのか？」

この質問に、幼いころのリニア・イベリンならこう答えただろう。

「父さんに見せたいから」

数年後、それは間違いだと、彼女は気づいた。いや、認めたといったほうが正確だろう。

「なぜ体術を学んだのか？」

この質問に幼いころのリニア・イベリンならこう答えただろう。

「父さんに見せたいから」

数年後、それは間違いだと、彼女は気づいた。いや、認めたといったほうが正確だろう。

今の彼女ならわかっていた。何故自分はそういうふう answered しまったのか。それは、すべて自分の都合のいいように解釈しなければいけなかった、言わば自分に対する理由付けが必要だったのだ。リニアはそう思っているが、果たしてこれが正解なのかさえも、彼女にはわからない。数年後、再びこの結論が間違いだと気付く可能性もあるからだ。

——人の心は、複雑で、自分勝手に、矛盾している。

リニアは遠い記憶を思い出していた。

彼女の父親は、リニアが妻に似ているという理由だけで彼女を避けていた。それは憎しみでも、怒りでもなく、現実という名の絶望あるいは恐怖からの行為である。

リニアの母親、サラ・イベリン。彼女はリニアを産んで間もなく亡くなった。それ故、リニアは彼女の顔を知らない。写真もすべて処理されていた。ただ一枚を除いては。

それはハンス・ブリーゲルとの、二人だけの秘密だ。

彼が内密に所持していた一枚、随分と古臭く、おまけに保存状態も決して良いとは思えないものだったが、リニアはその一度だけ母親の顔を拝むことができたのだ。

当時の彼女には、自身が母親に似ているかはわからなかったが、この写真に写る女性のような雰囲気を出せば、父親も自身に向き合ってくれるのではないかと、何度も何度も父親に会いに行くも、冷たくあしらわれていた。

当然、子供の心には深い傷跡が残る。そんな時だった、ハンス・ブリーゲルが彼女に体術を教え始めたのは。ハンスなりの気遣いなのだろうと、大人になった今の彼女なら理解できる。

しばらくして、リニアは自我が確立する年代にまで育った。様々な感情に揺れる思春期、彼女は金色の魔女に出会った。突然、家を訪ねてきた、自身の母親の友人だと名乗る女性に、リニアが興味を惹かれないわけがなかったのだ。彼女が金色の魔女の弟子になるのに、数日もかからなかった。リニアは父親にはもちろん、ハンス・ブリーゲルにも内緒で家を飛び出した。

母親と友人だったから、それだけではない。魔法が使えない体の彼女に、魔女は魔法を教えるといったからだ。結果的に彼女は魔法を体得したわけだが、それにはいくつかの条件が設けられていた。それは、彼女のような体の場合、魔法を扱う代償として自身の生命を支払わなければならないというものだった。魔法を一秒使うごとに、彼女の未来は一秒無くなる。おまけに、綺麗な茶髪は徐々に薄い銀色へと変色した。

銀髪の魔法使い——リニア・イベリン。

全てが見せかけの、作り物でできた名前だ。

だが、彼女は自身の名前を誇らしげに思っていた。リニアという名前には彼女の意思と意志が込められているからだ。ただ唯一、心に残るのは、イベリンという苗字をどうしても捨てられなかった。理由、それは彼女自身も未だわからないままである。

辺りは夕方になっていた。